



はじめに

夏休みが終わり、学園生たちがセンターへと帰ってきました。二学期の始まりです。このころは、まだ真っ盛りを感じさせるような暑さが続きますが、それでも朝晩は涼しさを感じる日が増えてきます。また、この時期は台風や夕立の一雨ごとに着実に秋が近づいてくるのが肌で感じられます。先日の台風10号到来の際は、センター周辺は幸い大きな被害は間逃れましたが、台風が去った後の数日間はぐっと肌寒い日が続きました。少し暑さはもどりましたが、それでも秋はもうすぐそこです。

センターは夏休みの間、短期の山村留学参加者でにぎわいます。今年の夏は、本当に晴天が続いたのが印象的でした。今夏は、長期コース、自然体験コース、ファミリーコースと3本の夏の短期留学の受け入れをしましたが、そのすべての日程で一度も雨による活動の変更がありませんでした。夏らしい晴天の中、海や川での水遊びや、キャンプなど、夏を満喫した忘れられない活動になりました。長期コースでは20名、自然体験コースでは30名、ファミリーコースでは4組9名の総勢59名の参加者が山村留学センターを訪れ、寝食を共にしながら活動に参加しました。夏休み中の限られた期間ではありますが、濃縮された体験になったのではないかと思います。数年間、コロナで実施できていなかった短期活動も、一昨年冬から再開し、短期参加者の中にもまたリピーターの子どもたちが増えました。この中からは非来年や再来年の通年留学にも挑戦する子が出てくれればと思います。

学園生達にとって二学期は大きな行事が目白押しです。夏から秋、そして冬が始まる12月まで、忙しい生活ではありますが充実した二学期の生活を送っていきたいと思います。

浅平 泰地

活動カレンダー

- 8月23日（金） 帰園
- 25日（日） 上立石納涼会
- 26日（月） 畑作業
- 9月 1日（日） ソロディキャンプ
- 9月 7日（土） 畑作業

帰園 8/23 (金) 晴れ

子ども達が実家からセンターへ戻ってきました。それぞれ、センターに着くと元気に挨拶する子もいれば、久しぶりの再会に恥ずかしいのか、照れくさいような顔で挨拶する子と色々ですが、ほぼみんな元気にセンターへ戻ってきました。

夏休みに家族で出かけた話や、色々な人と会った話、宿題の事などが聞けて、夏休みを思いっきり楽しんだことがよく分かりました。

数日はセンターで、夏休みの不規則な生活を規則正しく戻しながら生活しました。そして、2学期が始まりました。



上立石納涼会 8/25 (日) 晴れ

1学期から継続生が待ちに待った上立石納涼会がいよいよ開催されました。センターがある上立石自治会の交流会で、前日から地域の人と準備をしました。あまりセンターでは使わないような大きなテントを張ったり、バーベキューコンロを借りに行ったり、みんなで協力して作業は順調に進みました。

当日は、たくさんのお肉に野菜、おにぎり、海鮮、焼きそばと食べきれないほどのご馳走が並び、地域の人たちと食べたり、お



喋りしたりして楽しい時間を過ごしました。特別ゲストに教育長も来てくださいり、普段はあまり話したことない学園生も話したりすることが出来ました。最後はbingo大会をして盛り上がりお開きとなり、片付けも協力して出来ました。普段はあまり交流のない地域の方々との交流に1日楽しみました。

ソロディキャンプ 9/1 (日) 晴れ

1泊2日のソロキャンプへ向けて、これまで、ペアなどでやっていた子たちも全員ソロでお昼ご飯を作るソロディキャンプをしました。事前にミーティングをし、使う材料などを確認して、そこから各自何を作るのかを考え本番に臨みました。毎日晴天だったのに、前日は台風のため生憎の雨、当日は晴れたものの薪やいつも頼りにしている杉の葉が濡れているため、普段のような火起こしができるか心配の声も多くありました。

子ども達は、キャンプ場に着くと、各自竈となる場所を決め荷物を置いて、まず薪拾いに向かいました。雨の後で濡れている薪がほとんどの中、どういう木を集めたらいいのか、それぞれ工夫を凝らします。薪がある程度集まると、竈作りをして火起こしの準備をしました。マッチの数は基本10本。10本無くともいい人は、自分で決めて本数を減らす。10本では心配な人は5本まで



増やすことが出来るなかで、それぞれマッチの本数を決め持って行きました。マッチの本数が決まっているため、火をつけることにも慎重になる子ども達。慣れている子でも、なかなかつかない中、初めての子はどうしていいのか分かりません。考えて、やってみて、つかなくて・・・の繰り返し。なかなか火は起きました。自力で火がついた子はわずか4名。その他は、最後の手段、指導員に教えてもらって火をつけることが出来ました。最初に食べ始めた子も14時を回り、最後に食べられた子は16時近くになっていました。途中諦めて生の野菜をかじり始めた子もいましたが、最後は手伝ってもらってみんな自分のご飯を作って食べることが出来ました。



普段、薪が乾いていれば、火がついたであろうと思うほど、子ども達の薪を集め方や、竈の組み方には1学期たくさんキャンプをやってきたことが活かされていました。ソロキャンプでは、今度は大人の手も仲間の手も借りれません。今回の事を活かして、次につながりますように。



畑作業 8/26 (月) AM 9/7 (土) AM 晴れ

2学期の初めの畑活動は、夏野菜の収穫をしました。そして、恐ろしいほどに畑を覆っている草を取り、夏野菜でもう終わりのものは抜いてしまって、秋・冬野菜の植え付けをしました。2日ほどに分けて、草取り、畑おこし、畝立て、種まきをしました。どの日も暑い中だったので、短時間で集中して作業をしました。秋野菜は、大根、カブ、白菜に春も撒いた残りの葉物野菜の種を蒔きました。また、これから草取りなどを頑張って立派な野菜を作りたいです。



採れた野菜は毎日のご飯に並びます。スイカもたくさん採れたので、1週間ほど夕食時にはスイカを食べました。美味しいスイカが出来てみんな喜んで食べていました。



＼知魚楽（ちぎょらく）／

学生時代の勉強で、理解できなかったこと、忘れてしまいたいけれど忘れられないことがふと頭をよぎることがあります。そのような経験が皆さんにあるわけではないでしょうし、であるから、何でも話せる人にも「勉強できなかったことを思い出すことある？」といった話をしたことはありません。ということで今回ははじめて人前に出す話題です。

高校生になると、国語は現代国語、古文、漢文の3種類を学んだように思います。もともと、国語は苦手な教科でした。国語不出来の元学生が言うのもなんですが、最近（あるいは近い将来？）、漢文という単元がなくなるといった話を聞くと、これはこれで一抹の寂しさというか、なぜ無くすと思わざるを得ないです。さて、本題です。何年生のどの単元で学んだのか定かではないですが、ノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹さんの「知魚樂」という隨筆を何年かおきに思い出すことがありました。中国の古典「莊子」が出典で約2,400年前に生きた莊子（そうし）の話しがまとめられたもののひとつです。あらすじは、橋の上から川面をみると水面で魚がゆうゆうと泳いでいるのを見た莊子が「あれが魚の楽しみだ」といったところ、一緒にいた議論好きの惠子（けいし）という人が「君は魚ではない。ゆえに君には魚の楽しみなどわかるはずがないではないか」、莊子「君は僕ではない。僕が魚の楽しみがわかる、わからないといったことがどうしてわかるのか」・・といった問答です。まったく理解できなかったこと、どちらかに正解があるのかそもそも正解がない話しなのがわからないことが苦しめるのでしょうか。このたったひとつできごとから沼にはいりこみ以降、国語の試験はどれも赤点（あかてん。ケッテンという言い方をしていたような記憶あり。おそらく30点以下）で、夏休みの補習に通っていました。実は、ふた月前の6月号で＼池のほとりで／という記事を書きましたが、そのとき、ふと知魚樂という言葉を思い出し、いつかこの話を書こうと思っていました。先日、この知魚樂という隨筆が載っている「詩と科学」という本を大田市立図書館で借り、ほぼ50年ぶりに読んでみたところ、筆者の伝えたいところが少しあわかったように感じました。莊子と惠子の問答からすると、惠子の言い分が科学的であり、もとより、サカナのタノシミといった実証ができないことを排除する立場の方がより現実的だ。だけれど、「しかし、私は科学者の一人であるにもかかわらず、莊子のいわんとするところの方により強く同感したくなる・・」と筆者が書かれているところにとても共感できました。久しぶりに頭の別な使い方ができたことで、心の片隅にあったわだかまりのひとつが解決できそうです。

「くにびき通信」2024年8月号



大田市
山村留学センター
Sanbe Kodama Academy

〒694-0002 島根県大田市山口町山口1694

TEL: 0854-86-0700 FAX: 0854-86-0701 Email: o-sanryu@city.oda.lg.jp



大田市山村留学センター 公式ホームページ



バックナンバー